

対馬丸記念館で平山誠一さん（元中央執行委員）が講演  
沖縄で平和な海を希求する

沖縄県の対馬丸記念館で、戦後 80 年企画展が開催され、全日本海員組合・関西地方支部内に開設されている「戦没した船と海員の資料館」も協力団体として参画し、6 月 21 日（土）に、本組合の元中央執行委員の平山誠一さんが「戦没船を記録すること」を講演した。

戦争の記憶、疎開船「対馬丸」の悲惨な経験を風化させない

今年の 8 月 15 日は戦後 80 年の節目を迎えます。沖縄本島は太平洋戦争末期の 1945 年（昭和 20 年）4 月 1 日、アメリカ軍が上陸し、日本軍の組織的戦闘は 6 月 23 日までの 84 日間に及び、軍人だけでなく民間人にも多くの被害が出ました。両軍合わせて約 20 万人が犠牲となり、民間人の死者は県民の 4 分の 1 にのぼりました。

さかのぼる昭和 19 年 7 月、サイパン島の日本軍が全滅し、いよいよ沖縄が戦場となる危険が大きいと判断した政府は沖縄県や奄美大島・徳之島のお年寄り・子ども・女性を島外へ疎開させるよう指示を出しました。

政府の指示に従い、沖縄県は「沖縄県学童集団疎開準備要綱」（沖縄県の子どもたちを県外へ集団で疎開させる準備の決まり事）により学校単位で疎開事務をすすめます。多数の兵士が沖縄に移駐し大量の食糧が必要になり、民間人を県外へ移動させることが急務だったのです。

当時、沖縄・鹿児島間の海域にはアメリカ軍の潜水艦が出没し、日本の船が攻撃を受け沈められていたため、親たちはとても心配しました。

しかし、一方で沖縄にとどまればアメリカ軍の攻撃を受ける危険もあると考えました。疎開をさせる当日、那覇港に待っていたのは、対馬丸をはじめとする貨物船 3 隻と 2 隻の護衛艦で、親たちはこれら 5 隻からなる「ナモ 103 船団」を不安な気持ちで見送ったのです。

対馬丸は、民間徴用船で 1944 年(昭和 19 年)8 月 21 日、疎開船として那覇市内の学童約 800 人、一般疎開者、船員など合計 1788 人を乗せて那覇港を他の 2 隻の疎開船と共に護衛艦 2 隻に護衛され長崎に向け出港しました。

翌 22 日の夜、鹿児島県悪石島付近で米国潜水艦ボーフィン号の魚雷攻撃により沈没。およそ 1500 人の尊い命が犠牲となり、生き残った約 280 人も命の危険にさらされました。「対馬丸記念館」は、この悲惨な体験を通じて、「戦争からは何も生まれない」と伝え続けています。

「海員だより」